



花は桜木、人は武士 —我、研究生活を想ふ—

福澄 岳雄

Everything Okey? 我らがBode教授のお決まりのセリフだ。今日もこの言葉に緊張が走る。私は今、アメリカ東海岸のフィラデルフィア、ペンシルバニア大学化学科にて、有機合成化学研究室のポスドク（博士研究員）として働いている。秋空の下、歴史を感じるペンシルバニア大学の赤レンガの建物は物言わず静かにその面を構えており、その2階の実験室で、私は今日も研究修行生活だ。そんな私が、自身の研究修行生活を書き綴ってみようと思う。

修士課程から博士課程、そしてポスドクへ

私の研究生活の中で大きな転機となったのは、修士課程から博士課程への進学であった。指導教官に恵まれ、ユニークな先輩方に会ったことが、研究の面白さを知り、有機合成というものづくりのプロを本格的に志すきっかけとなった。単純に研究への好奇心のみが原動力となり、仲間と共に実験に没頭し、無我夢中で大学院生活を過ごしていた。2007年3月に工学博士号を授与され、振り返れば、あっという間の学生生活が終わっていた。多くの苦難や壁を乗り越え、研究能力のみならず、人として一気に成長し、学位授与に至った。すべては指導教官、友人、両親の支えによってなされたものであり、言葉では言い表せないほど感謝している。頑張る姿を見せることが、お世話になった皆様への恩返しであると、勝手に解釈していることをお許し願いたい。これからは学位という肩書きを持つプロとして、厳しい研究競争の世界で生き残っていかなければいけない。

より厳しい環境を好むという、少し妙な気質の私……。更なる飛躍の機会を求めてポスドク修行を志願し、幸運にもそのチャンスを手にすることができた。それも、世界トップ水準の研究グループの一員としてだ。

海外での博士研究員は、自分自身の可能性への挑戦である。私が可能性のある研究者なのかどうかは誰も知らない。誰にもわからない。だからこそ、より厳しい環境に身を置き、挑戦したいのである。研究だけではない。今までに見たこともない不思議な文化や習慣を、自分の身をもって体験できるのである。観光や旅行ではなく、海外の地で長期間滞在し、現地での生活に溶け込むことができる貴重な経験である。見るもの触れるもの、すべてが初体験。おもしろくないはずがない。

アメリカでのポスドク研究修行生活、サンタバーバラ、フィラデルフィア、そして……

私のポスドク修行は、アメリカ西海岸カリフォルニア大学サンタバーバラ校でスタートした。毎日が快晴で爽やかな気候の、スペイン風の町並みの特徴とした風光明媚な超高級ビーチリゾートだ。ある程度、英会話の自信をつけての渡米ではあったが、言葉と文化の違いに戸惑い、孤独感を感じると共に食事ものどを通らず、激やせした。これは時間が解決することであり、今ではそんな当時が懐かしい。ボスであるBode教授が、東海岸のペンシルバニア大学に高待遇で引き抜かれたことに伴い、現在はUPennの愛称で親しまれるペンシルバニア大学へと異動してきている。ペンシルバニア大学は、全米を代表する名門校のひとつで、想像を絶する巨額の研究費と、最先端の研究教育施設、大学病院を抱えている。その赤レンガを基調とする建物には歴史を感じ、フィラデルフィアの街に溶け込むように大学関連施設が並んでいる。校門や校舎を囲む塀などない。街の一部がペンシルバニア大学なのだ。数多くの著名な研究者を輩出し、研究大学としても教育大学としても、そして大学病院としても、その評価は高い。語学留学などという遊び半分の学生を目にすることも今のところない。研究と勉強をしたい者のみが集まり、さらにそれをサポートする体制が万全に整えられている。

フィラデルフィアはというと、合衆国誕生の地で、歴史的で芸術を愛する全米第5位の大都市だ。ペンシルバニア大学の横はダウントウン。そして独立記念公園と呼ばれる歴史的な地区が広がっており、数多くの美術館や博物館が点在している。それも世界的に有名なものばかりである。それらの建物は、ロッキーやナショナルトレジャーでもお馴染みのアノ光景だ。数々の映画の撮影現場として使われたこれらの場所は一度はテレビで見たことがあるかもしれない。さらにメジャーリーグ、ワールドチャンピオンとなったフィリーズの本拠地がフィラデルフィアであり、優勝を決めたその瞬間は都市全体が怒涛の地響きに包まれた。

アメリカには、今までに見たこともないような天才肌のポスドク軍団（プロの研究員）がごろごろおり、世界最高峰を肌で実感している。その猛者たちを引っ張る教

授陣の研究アイデアや手腕は、言うまでもなくズバ抜けている。私のボスである Bode 教授も若干 30 代前半にて大規模な研究チームを牽引し、従来の常識を覆すような研究成果を連発している。日米間の研究体制には大きな違いがあることもひとつの要因だが、私にはその世界最高峰の教授の背中が、はるか遠くにしか見えないのが現状である。

こんな多国籍軍の中での研究修行を送っているからこそ、忘れかけた大和魂を思い起こさせ、日本のすばらしさを再認識することができている。宗教感を持たない日本人の根底に流れるものは武士道。日本人は武士道精神を通じて、幼少期の道徳教育がなされてきた。打算や損得を超越し、自分が正しいと信じる道を貫く。研究は、自分の興味だけでその方向性が決まる。評価は後からついてくるものだ。私は生粋のサムライ日本人。細かな気配りや配慮ができ、謙虚で礼節をわきまえ、さらに控えるところは控え、押すところは押す。そんな器用なことができるのが私のセールスポイントなのかもしれない。

誰がよんだか、パーティー・ポスドク

広い化学科において、パーティー・ポスドクとしての地位を確定的なものにしており、他の研究室の大学院生からも、よく声をかけられる。「Whats up! Party post-doc, Takeo!」自然体でふるまう自分に、いつのまにか周りがパーティー・ポスドクと愛称をつけたのだ。おしとやかで知的なポスドク軍団の中で、私は年齢も若く、抜群のノリのよさと、明るい性格、酒が飲めること、踊って歌って、スポーツやサーフィンもし、なんといっても疲れ知らずのハードワークで朝から深夜まで働くので目立つのであろう。私がここに来たからこそ、パーティー・ポスドク・タケオという造語が生まれたのかもしれない。仕事と遊びの時間がはっきりと分かれており、どちらも人並み以上のフルパワーで取り組み、そして、大学院生への的確な指示やアドバイスも重なり、研究に対する評価が高いからこそ、皆からも認められ、良い意味でのパーティー・ポスドクの地位を獲得しているのかもしれない。外国人の私が、研究の中心メンバーとして活躍していること自体が不思議な光景だ。そして、パーティーでもしかり。

挑戦への指針 —勇気を与えてくれる言葉—

私は、海外での博士研究員という道を選んだ。多くの友達はどう言う。「へえ、頑張ってるね」。そして時には「何がしたいの?」と。そう言葉をかけられると、こんな言

葉を逆にお返しすることが多い。

「チャンスは平等、チャレンジは勇気、年齢と性別は関係ない。だから挑戦するんだよ」と。

自分が成功者だとは、今まで一度も思ったことがない。常に食欲に、挑戦者の気持ちでいる。今の状況に満足してしまっただけは、それ以上は成長しないと知っているからである。そして、挑戦への機会は誰もが平等に与えられている権利。人それぞれおかれている状況は違えど、挑戦するには思い切った勇気が必要。その勇気を出すか出さないかはその人しだいというわけだ。可能性があれば私は挑戦してみたい。そして、なぜか根拠のない自信があるのである。理由は説明できない。新しいことを始める時、挑戦する時、そんな時は不安で仕方がない。不安なはずなのに、挑戦することへの意欲が勝り、楽しみで仕方がないのである。根拠のない自信と共に、根拠のない自信があるからこそ、思い切った挑戦ができる。よい意味での自信。常に前向きで、失敗を恐れず挑戦したい。もちろん、場合によっては熟慮した後に判断することが重要である。

松井秀喜が自分で自分のグローブを磨くように、イチローが人知れず影で努力するように、桑田真澄が挑戦の気持ちを失わないように、松坂大輔のように大胆に、日本を代表する世界のトッププレーヤーと同じ土俵で物申すのはおこがましいが、私も自身の可能性に挑戦する。勝者は決してあきらめない。くじけた時点で終了である。

サムライ研究者

これまでの研究を通じ、合成化学研究における最大の弱点は、複数の境界領域間で多彩な才能を発揮できる研究者が不足し、優れた研究成果をその応用研究へと発展させられないことだと痛感している。特にものづくりを基盤として発展してきた日本の合成化学者は、各方面からの研究を集約し、独自のアプローチを生み出すことで欧米をリードし、アジア諸国を牽引することができると考えている。つまり、日本の将来のため、世界最高峰の研究室でオンリーワン・ケミストリーを学ぶことが、日本人若手サムライ研究者である私に託された使命である。

最後に、私は「頑張る」を「顔晴る」と、このように書く。どんなに辛いことがあろうとも、苦しくとも、笑顔が幸せを運んでくると信じているから。辛い時こそ顔晴るのである。

フラスコ片手に武者修行。いつも応援してくれてありがとう。岳雄はこれからも顔晴ります。